

# 元ハンセン病患者 生への渴望映す

練馬区に住む日本映画学校(川崎市麻生区)の卒業生が卒業制作でハンセン病をテーマにした作品「熊笹の遺言」を作った。群馬県草津町にある国立療養所栗生栗泉園で暮らす3人の元患者の姿を映し出すドキュメンタリー映画だ。29日から渋谷で一般公開される。同校ではハンセン病を描いたメディアをめぐるシンポジウムもある。

(芳垣文字)

## 映画「熊笹の遺言」



今田哲史さん

昨年9月、77歳で亡くなった鈴木時治さんは生前、不自由な手に絵筆を固定してキャンパスに向かっていた。家族に対する差別や偏見を苦に、妹は自殺した。その妹を描いた絵を抱き、故郷を流れる利根川に赴く鈴木さんをカメラは追う。

浅井あいさん(84)は29日の制作に打ち込んだ鈴木時治さん

## 亡き妹を描く姿や少年との交流追う

練馬・今田さんが監督

歳で失明した。61年間連れ添った夫を亡くし、ハンセン病国家賠償請求訴訟で勝訴した後、故郷金沢への里帰りを果たした。その時、目の不自由な小学生の少年と出会い文通を始めた。栗泉園を訪ねた少年に浅井さんは静かに語る。「あたし、おぼあちゃんと呼ばれたこと一度もないの……」

映画の最後は、国家賠償請求訴訟で東日本原告団代表を務めた笹雄二さん(72)が故郷、東京都町の川の土手で、重いす

のままたこ揚げに夢中になる姿だ。少年時代に戻ったような表情が印象的だ。

映画を企画、監督したのは今田哲史さん(28)。03年に日本映画学校を卒業した。きっかけは01年、国家賠償請求訴訟の熊本地裁判決で原告側が全面勝訴したニュースだった。ハンセン病の名称は知っていた。だが、どんな病気か、どんな政策が取られてきたか、全く知らなかったことにショックを受けた。

「療養所の中で元患者の人たちが何を感じ、どのように生きてきたかを

知りたかった」卒業制作のテーマに決め、東村山市の国立療養所多磨全生園に何度も足を運び、入園者に声をかけて話を聞いた。

思うように人が見つからず、途方に暮れた時期もあった。そんな時に、栗生栗泉園を知り、鈴木さんたちに出会った。今田さんが監督と編集作業、ほかにも3人の卒業生が加わった。02年5月からカメラを回し始め、翌年1月までインタビュ

ーを続けた。60分ビデオで140本を撮影し、

1時間の作品にまとめた。タイトルは、園内に生い茂るクマザサにちなんだ。「三人三様の生きることへの渴望、社会と誠実に向き合う姿を見て欲しい」と今田さんは話している。

鈴木さんが亡くなったのは、映画の公開が決まる直前。浅井さんは撮影終了後に痴呆症となっ

て、映画のことはもう理解できない。それでも浅井さんは「それぞれの人間性がよく出て、素直に映像化された作品」と公開を喜んでいる。

## 29日公開、メディア巡るシン・ホモ

上映は渋谷の「ユロスペース」(JR渋谷駅南口下車徒歩2分)で、前売り千円、当日券1200円。問い合わせは「CINEMA塾」(03・5360・1668)。

上映に先立つ8、15、22日の3日間、日本映画学校(小田急線新百合ヶ丘下車徒歩1分)で、「映像メディアはハンセン病をどう描いてきたか」をテーマに、同校の佐藤忠男校長や笹さんらをパネリストにしたシン

ポジウムが開かれる。「砂の器」(15日)など「小島の春」(8日)、映画やテレビドキュメンタリー作品も上映される。入場無料。問い合わせは同校(044・951・2511)へ。